生きる チ・カ・ラ

瀬戸 桃子［埼玉県］

今年のはじめ、父が余命宣告をうけた。末期ガンでもって半年。明るく、冗談ばっかりの父から笑顔が消えた。傍らの母も泣いてばかり。おろおろするばかりの私は、何もできない。

そんな時、娘がこんなことを言った。

「私、じじと文通しようと思う。」

孫十一歳、じじ七十歳。今まで、殆ど交流のなかった二人の文通がはじまった。

娘の手紙には励ましの言葉はない。それでも娘の手紙は、魔法のようにじじの心をつかんだ。じじの好きな音楽やドラマの話。じじの子供の頃の夢の話。娘の将来の夢の話。時には、娘のクラスにいるオネエの男の子の話。

ある時、娘が

「じじの未来の夢はなに?」

と聞いた。もう未来なんてこないと思っていたじじは、返事に困った。けれど、文字で書いているうちに、どんどん楽しくなっていった。

じじの夢は、岡山の田舎でピオーネを作ること。しかし、病気になってから、あきらめていた。手紙を出したその日、じじは岡山へ行った。抗ガン剤治療をうけながら作業することは容易ではない。でも、父の顔には、以前のような笑顔がもどった。

いつしか娘は、じじの返事が待ち遠しくて、ポストを開けたり閉めたりするようになった。じじは、文通が「生きる力。」と言っている。私は大切なものを二人から教えてもらった。

あれから半年が過ぎ、もうすぐ暑い夏がやってくる。

二十通目は、

「二人で、岡山へ行く計画だよ。」

娘が、ニコニコして私に教えてくれた。